

武蔵野日曜聖書講筵

唯汝のみ

――詩篇第73篇――

1993年3月7日

小池辰雄

躓いたり転んだり サタン的な高慢 天上天下誰をか慕おう ただあなただけ！ 親鸞の『歎異鈔』 即如の世界 ただキリストのみ 永遠の生命 自分の救いすらも問題にしない

【詩篇73】（私訳）

アサフの絃歌

1 神は恵み深い哉！

イスラエル、心の清き者に対つて。

2 だが私は、わが脚は踰めくばかり、

わが歩みは滑って転ぶも同然。

3 そは私は驕る者を妬んだり、

悪者の平安を見たりするから。

4 そは彼らの痛み苦しむことなく、

その腹は肥え太っているから。

5 彼らはかなき人の憂苦に処らず、

人と共に患難に遭わない。

6 だから高慢はその頸飾で、

強暴は彼らを蔽う衣だ。

7 その眼肥えてとび出で、

心の食欲は溢れみなぎる。

8 彼らの嘲り、悪意で暴虐を語り、

慢つてものを言う。

9 彼らその口を天に置き、

その舌は地をねり歩く。

10 この故にこの民は彼らに従い、

彼らのため酒水はさわに溢れる。

11 彼らは嘯く、「神がどうして知ろう、

至高者に悟りがあるか」と。



12 見よ、是らは悪者でありながら、
時めき驕り富み栄える。

13 まことに私は徒らにわが心を清め、
辜なくしてわが手を洗った。

14 私は終日患難に処り、
朝ごとに譴責を受けた。

15 若しや私がかく言おうとすれば、
見よ、汝が子らの代を害うことになる。

16 私はこれを悟ろうと想ったが、
わが眼に痛みがのぞんだ。

17 終いに私は神の聖所に往つて
彼らの終末を究めんとした。

18 然り、あなたは彼らを滑らかな処に置き、
彼らを滅亡に墜し給う。

19 彼らはいたく破れよう、瞬く間に。
彼らは絶えて果てよう、畏懼のために。

20 主よ、目さめる時の夢の如く、
あなたはその目ざめに彼らの幻像を嘲り給う。

21 わが心痛めつけられ、
わが腎が刺されたとき、

22 私は愚かで悟りなく、
み前に痴者の如き態であつた。

23 だが私はつねにあなたのみ許に止まり、
あなたはわが右の手を保ち給うた。

24 あなたはその諭言をもつて私を導き、
後に栄光を以て私を受け容れてくださろう。

25 天上天下誰をか慕おう。
ただあなただけ！

26 わが身わが心は衰えるとも、
神は絶えずわが心の磐石、わが嗣業。

27 見よ、あなたを離れ去る者は亡びゆき、
あなたから脱落する者は皆滅ぼされよう。

28 だが私は、わが善福は神近くに在ますこと。
私はわが主エホバに拠所を置き、



あなたの聖業^みをすべて宣^のべ伝えよう。

●躓いたり転んだり

この詩篇73篇25節が一番大事な言葉です。

「天上天下誰をか慕おう。ただあなただけ!」

今日の題はこの「ただ汝のみ」です。73篇から89篇までは詩篇の第三巻という。詩篇は全部で五巻まである。私はこの第三巻のうち、73、80、84、85と87篇の五つを選んで、著作集(第四巻『詩篇珠玉集』1980年刊)に書いてます。

「アサフの絃歌」の「アサフ」とは「集める者」という意味です。祭司階級のレビ人で、神殿の聖歌隊が三つあるけれども、その一つの楽長である。詩篇第50、73、83篇がこの「アサフの子らの聖歌隊」の讚美歌集です。

「神は恵み深い哉!」

イスラエル、心の清き者^{むか}に對つて。

神は「心の清き者」に恵み深いのは当然のことでしょう。しかし、神の恵みはなにも「清き者」に限ったわけではない。むしろ、恵みはどん底のひとにやってくる。そこが、旧約と新約との角度の違いです。もちろん、旧約にも、

「心の碎けた者に神は近づきたもう」

ということがあります。「心の清き」とは、キリストの言葉に、

「恵福^{さいわい}なるかな、心の清き者、その人は神を見ん」

とある。雑念がないわけです。自我のないこと。キリストはその角度から仰ったわけでしょう。詩篇の第24篇4節にも、マタイ伝5章8節にも同じような言葉があります。

「だが私は、わが脚は踰^{よろ}めくばかり、

わが歩みは滑^よつて転ぶも同然。

滑ったり転んだりよろめいたり、自分の歩きはなつちやらん、というわけです。自分の平常の歩き方がダメだと。歩き方というのはもちろん生活の仕方です。正直に、そう言っているわけです。誰だつて、躓いたり転んだりしますから。同じようなことです。神無くして生きていたら、正直、躓いたり転んだりです。そうでないような人もありますけれども。

「躓いたり転んだりして、神さまがいなければ、キリストがなければどうにもなら

ない」

という方が結局、その人の人生の方が本当のものになっていく。いわゆる人間的にただ整っていたつて、これは――面白味がないと言つてはおかしいけれども――本当の生命が欠けている場合が多いようですね。

それは何故そうかというと、



3 そは私は驕る者を妬んだり、
悪者の平安を見たりするから。

そうすると、こちらの気持が何かゆらぐ。そういう意味で、「よろめくばかり」ということで、原因がそこにあるんだ、というようなことが書いてあるわけです。

●サタンの高慢

4 そは彼らの痛み苦しむことなく、
その腹は肥え太っているから。

5 彼らはかなき人の憂苦に処らず、
人と共に患難に遭わない。

それではこっちはどうにもならん、というようなことです。よくある現実の一つです。

6 だから高慢はその頸飾で、
強暴は彼らを蔽う衣だ。

なかなか詩的な表現になっている。

7 その眼肥えてとび出で、
心の食欲は溢れみなぎる。

8 彼らの嘲り、悪意で暴虐を語り、
慢つてものを言う。

9 彼らその口を天に置き、
その舌は地をねり歩く。

これは凄い表現です。驕りのすがたです。このような言葉は、イザヤ書14章13節に、

「汝さきに心中におもえらく、われ天にのぼり我れくらいを神の星のうえ
にあげ、北の極なる集会の山にぎし」(イザヤ14・13)

そういうった驕った気持はサタンのなんです。サタンの高慢です。ミルトンが『パラダイス・ロスト』の第一巻の34行から39行の所にこのことを歌っています。そういう高慢ちきな心と在り方がよくあるわけです。

10 この故にこの民は彼らに従い、
彼らのため酒水はさわに溢れる。

11 彼らは嘯く、「神がどうして知ろう、
至高者に悟りがあるか」と。

神さまを嘲っている。まだ、こういう罪は、ひっくり返されれば、赦されますけれども、

「聖霊に逆らう者は赦されない」

とキリストが言っている。「神・キリスト・聖霊」は三位一体ですから。「聖霊に逆らう」ということは――十字架が土台ですから――十字架の土台のないところには聖霊がこない。



聖霊は、十字架を本当に受けとるところに来る霊であって、十字架なしに聖霊なんて言っている、そいつはサタンの高慢な霊に切り替わる、

「俺は霊的になった」

なんて言ってる。十字架と聖霊は絶対に離してはいかん。本当に十字架されれば聖霊はくる。聖霊が本ものであるためには、十字架が土台でなければダメです。このことが案外、キリスト教界ではつきりしていない。

「神がどうして知ろう、至高者^{いとたかきもの}に悟りがあるか」

なんて言ってる、神さまをけなしている。これはサタンの傲慢だ。ということは、

「悪者がはびこっているのに神さまは何をしているのか」というようなところも反面にあるわけです。

●天上天下誰をか慕おう ただあなただけ！

12 見よ、是らは悪者でありながら、

時めき驕り^{おご}富み栄える。

13 まことに私は徒らにわが心を清め、

辜^{つみ}なくしてわが手を洗った。

14 私は終日患難^{ひねもすなやみ}に処^おり、

朝ごとに譴責^{せめ}を受けた。

15 若しや私がかく言おうとすれば、

見よ、汝^なが子らの代を害うことになる。

16 私はこれを悟ろうと想ったが、

わが眼に痛みがのぞんだ。

けれども、自分はいろいろな患難にあつたり責められたりするけれども、仕方がないから、

17 終いに私は神の聖所に往つて

彼らの終末^{おわり}を究めんとした。

18 然り、あなたは彼らを滑らかな処^{なめ}に置き、

彼らを滅亡^{ほろび}に墜^{おと}し給う。

19 彼らはいたく破れよう、瞬間^まに。

彼らは絶えて果てよう、畏懼^{おそれ}のために。

20 主よ、目さめる時の夢の如く、

あなたはその目ざめに彼らの幻像^{まぼろし}を嘲り給う。

「夢の如く」というのは、夢は儚い^{はかな}から、儚さを言っているわけです。儚いものを頼りたのんでいるから、彼らは直ぐ滅びてしまう。私は「幻像」と書いて、「まぼろし」と読んでいるが、これは「ツエレム」という字で、



「神の相に人間を造った」

という、あの「神の相」と同じ字なんです。

「キリストは神の相」

というのにもブライ語で言うと同じ字になる。この場合は「ツエレム」という字を「幻像」のような意味で使っている、珍しい例です。

21 わが心痛めつけられ、

わが腎が刺されたとき、

22 私は愚かで悟りなく、

み前に痴者の如き態であった。

そのようなことで、こちらの心が動くようでは、本当はダメなんです。しかし、そうかと思うと今度ははつきりしたことも書いてある。

23 だが私はつねにあなたのみ許に止まり、

あなたはわが右の手を保ち給うた。

「右の手を保つ」ということは力を与えるということです。

24 あなたはその諭言をもって私を導き、

後に栄光を以て私を受け容れてくださろう。

だから、

25 天上天下誰をか慕おう。

ただあなただけ！

ということですよ。

●親鸞の『歎異鈔』

親鸞の信仰の一端を『歎異鈔』の中から紹介します。

「親鸞におきては、ただ念仏して彌陀に助けられ参らるべしと、よきひと（法然）の仰せを蒙りて信する他に、別の子細なきなり。念仏はまことに浄土に生るるたねにてやはべるらん、また地獄におつべき業にてやはべるらん、総じてもて存知せざるなり。たとへ法然上人にすかされまゐらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからず候ふ。……いづれの行も及びがたき身なれば、とても地獄は一定のすみかぞかし」（歎異鈔）

これは実に徹底した信仰ですね。

「たとへ法然上人にすかされまゐらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからず候ふ」

地獄におちても一向差し支えないと。だから、親鸞の信仰はただ救いのための信仰ではない。「地獄であろうと、極楽であろうと、どっちだっていいんだ」



と。衆人を救済する使命をもった親鸞は自分の救なんてことは考えてない。だから、念仏も親鸞自身には救いのためでない。念仏は念仏しているそのこと自体が、無限の世界である。これは非常に大事なことです。結果を問題にしない。

「南無阿弥陀仏と言っていること自体が一切だ」と。

「無量寿無量光の覚者（仏）に南無（帰依）する」ことが「南無阿弥陀仏」の意味ですから、「南無阿弥陀仏と言ってさえいいんだ」

と。だから、これは無即無限無量の絶対境です。しかも、法然は何辺も称えるようなことを言っていたけれども、親鸞は、一辺で一向差し支えない。数なんかは問題にしてない。ただ、言っているときには本当にその境地に入っていないといけない。その点では親鸞の方が法然よりも徹底している。法然をもうひとつ上回ったのが、深化したのが親鸞です。

この『歎異鈔』の独訳を読んで、世界の大神学者バルトが、こんな信仰があるかと驚いた。「南無阿弥陀仏」もただ救いのためでも何でもない。

「南無阿弥陀仏と称えていることそれ自身が絶対境だ」

という。彼は、今までのいい加減な坊さんと違って――坊主であろうと凡人であろうと妻帯して――坊主が妻帯して何が悪いかと。マルチン・ルターが尼さんと結婚した。親鸞も恵信尼と結婚した。そういう本当の人間の道は僧侶であろうと一向差し支えないんだと。「女犯」という言葉があるが、あの「犯」という言葉がどうも誤解されがちで困る。女性と交わることを「女犯」といつている。

西では宗教改革者ルターがそれを破った。東では親鸞がそれを破って、僧の妻帯を公然と自証したわけです。六角堂で救世観音が白い袈裟がけで現れた。白蓮の華に端坐して告命する。

「行者宿報設女犯 我成玉女身被犯

一生之間能莊嚴 臨終引導生極楽」

（行者宿報して設ひ女犯すとも、我は玉女の身と成りて犯せ被む。一生之間能く莊嚴し、臨終に引導して極楽に生ぜしめん）

そういう言葉を受けとった。なかなか面白いです。

●即如の世界

とにかく、バルトがこの親鸞の信仰で驚いた。

「極楽であろうと、地獄であろうと、どちらでもいいんだ」

と。「南無阿弥陀仏」と称えて、無量寿無量光の覚者の中に南無すると、逆説的にいうと、自分がその称えていることそれ自身がもう既に極楽なんです。結果を問わない。本当の信は「即」「即如」の世界ですから。我々が心の中で、



「主さまー！」

と本当に叫べば、直ちにキリストの中に自分が消えてしまう。我がない。そういうところが信の現実です。

「信仰」

なんて、「仰」はいらない。仰ぐのではない。「信」だけでたくさんだ。もし言うなら、

「信交」

霊的な交わりの世界です。だから、自分が消えてしまっている。我がない。我が無いということは、キリストの中に入れられてしまっているということです。

「主さまー！」

と言つて自分が消えている。どこに消えたかと思うと、

「キリストの中に消えていた。姿はキリストと一つとなって消えてしまった」

と。そういうのが本当の現実で、それが本当の力の世界です。

そういう融合の境地は、最長・空海が先ず初めに悟った。最長・空海は霊的神秘の世界です。法然・親鸞は、「南無阿弥陀仏」の称号です。それが、しかし本当のところでは結局は同じことになる。一般の人には、その境地はなかなか難しい。だから、

「ただ南無阿弥陀仏と心から言えばそれで極楽往生だ」

と言つて勧めているわけです。もう、親鸞あたりになると、

「極楽往生すらも考えない。どちらでもいいんだ、南無阿弥陀仏だけで結構だ」

と。ということは、本当は称えているときに既に本当の極楽にいるわけです。だから、

「念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからず候ふ。……地獄は一定のすみか

ぞかし」

と。だから、どうでもいいんだと。バルトがこの文章を読んで驚いた。

「いわゆる自分の救いのためではない。救いは神の栄光の現れである」

と。それならいいですよ。イザヤ書にその角度からの言葉がありますけれども、自分が救われるためとなると、やはり自己本位になつてしまう。幸福主義になつてしまう、宗教的幸福主義に。人には大いに救いを宣伝していい。けれども、自分は同じ角度にいたら本当はダメなんだ。

法然を更に徹底したのが親鸞だ。私は親鸞というのは凄いやつだなと思った。禅の世界は聖道門しょうどうですけれども。親鸞は完全に他力たうきの道です。他力も、自分の救いのための他力ではない。本当の本願道だ。

「たとえ自分が滅びようとも」

という角度の言葉はヨブ記の中にある。ヨブも非常に徹底した信仰にはいった。いろんな問答をやっていますけれども。それが本当の無の世界です。虚無ではない。無というのは凄い。本当の無の世界に入ると、この内容は無限無量なんです。無即無限無量。量りがたい。



とても表現なんかできない。宗教の本当の世界は、説明なんかできる世界ではない。

法然の門弟の住蓮、安樂の死罪に連座して、法然も親鸞も流刑に処せられた。法然は土佐へ流され、親鸞は越後に流される。ところが、流されると、流され先で両方ともちゃんと伝道している。

「ああ、ありがとうございます」

というわけで、逆に今度は伝道している。絶対に屈しない。国府の支配下にあつたって、そんなことは一向差し支えない。衆生済度しゅじやうのため、「南無阿弥陀仏」の世界を言わざるを得ない、語らざるを得ない、伝えざるを得ない。だから、全越後に広まった。とうとうしまいに関東まできた。

●ただキリストのみ

そこで、詩篇の73篇に戻ります。

「天上天下、誰をか慕おう。ただ、あなただけだ」

という。我々にとっては、この

「ただ、あなただけ」

というのは、言うまでもなく、キリストです。

「ただキリストのみ」

です。

キリストの「贖罪」「罪の贖い」ということを、そういう命題をいくら頭で信じたって、あるいは、ただ心で信じたって、まだ、そのところは観念なんだ。本当に、

「われキリストと共に十字架せられたり、もはや我れ生くるにあらず」

と。相対的人間小池は生きています。けれども、本当はもう生きていないんだと。

「キリストわがうちに在りて生くるなり」

という、パウロの告白。パウロは、

「もう自分は生きていない。ただキリストが私の中で生きている」

と言って、キリストと一つになってしまった。そういうキリストは十字架・聖霊のキリストです。「キリストわがうちに」というのは聖霊のキリストです。あるいはキリストの聖霊と言ってもいい。聖霊なしで、ただ「キリスト」なんて言ったってダメです。キリストは天界にいらっしやるんだから。

「キリストがわが中に」

というときには、聖霊のキリスト、あるいはキリストの聖霊ですから。それは宗教の神秘というものは仕方がない、そういうものだから。同時に、あなた方一人ひとりに同じように入るわけだ。

「あなたの中に入ってしまったから、こつちには入りません」



なんて、そうじゃない。宗教の世界はそんなものではない。太陽は一つ光っているんだけど、万物にその光がくると同じことです。月の影が葉末の露にみな映るように。

要するに、そういった霊的な現^{うつ}です。信即現である。本当の信仰の世界は現である。思われている世界、いわゆる信じている世界ではない。現なんです、現実なんです。現実でなくて、どこに力があるか。希望すら、未来のことすら、現実化してしまう。これを終末的現実という。終末的現実を体の中に持っている。

「天国はなんじらのうちにあり」

というのがそのことです。天国は、神の国は、新天新地は歴史の終りにやつてくるでしょう。終末の世界はどういうことだか知らないけれども、それは書いてある。

「終末の、その新天新地は既に我がうちにあり。黙示録の終りは現に私の中にあります」

という、二重構造になる。そういうもの凄い世界を知らない、あるいは学ぼうとしない方はお気の毒だと思う。

「ああそうですか、キリスト教ですか、それはちよつと……」

なんて、みな敬遠してしまう。私は宗派的なことを言っているのではない。仏教であろうとキリスト教であろうと、みな吞んでしまう。本ものはみな吞んでしまう。しかし、仏教とキリスト教の他には本ものはちよつとないね。これは二大宗教です。西欧と東洋に神さまはどのように真理の世界を展開した。

●永遠の生命

東洋といえば、一番神秘的な素晴らしい所はチベットなんだ。ヒマラヤ山の北の方。チベットの人間はもの凄い聖化された世界に入る。場所が天に近くてきれいな空気の世界です。チベットの聖者というのは凄い。ちよつと死なないような境地まで入れる。千何百年ぶりに現れたなんていうやつがいるんだからね。ウソじゃない。死体が霊化してしまうらしいね。とにかく、霊の世界は凄いから、限らないから。

とにかく、「永遠の生命」があなた方に来てしまっているんですから、何歳で死のうたいいですよ。

「私の肉体は朽ちても、私自身は死にませんよ」

とはつきり言えなくてはいかん。永遠の生命ですから。霊体がちゃんと中側からできてくる。魂は裸でいない。

「我もなく世もなく ただ主のみいませり」

という讃美歌がある。あれは素晴らしい。「主のみいませり」というのは、主の中に自分が入ってしまったって、自分は見えない。だから、「南無阿弥陀仏」の「南無」というのは、

「帰依、帰入、祈入」



すること。お願いではない。我欲的なお願いはみなきかれない。人のために執成^{とりな}す祈りはきかれる。根源現実できかれている。

「天上天下、誰をか慕おう。ただあなただけである」

という私の訳のところをルターは、

「あなたをさえ持つならば、私は何をか天地に求めよう」

と訳している。この有名な句に因んで、ノバールスがある詩を書いている。その一節に、

「私が彼をさえ持つならば、

彼が私のものでさえあるならば、

わが心、奥津城^{おくじき}まで

彼の信実を決して忘れないならば、

何ら悩みを知らない。

帰依と愛と歓喜のほか何も感ずることはない」

と、はつきり書いている。ローマン派の詩人です。

●自分の救すらも問題にしない

親鸞の歎異鈔の言葉をもう一辺読みますと、

「親鸞におきては、ただ念仏して彌陀に助けられ参らすべしと、よきひと（法然）の仰せを蒙りて信する他に、別の子細なきなり。念仏はまことに浄土に生るるたねにてやはべるらん、また地獄におつべき業にてやはべるらん、総じてもて存知せざるなり。たとへ法然上人にすかされまゐらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからず候ふ。……いづれの行も及びがたき身なれば、とても地獄は一定のすみかぞかし」

もう、こういうように、魂が突き抜けているね。本当に我無き世界です。だから、自分の救すらも問題にしてない。一生懸命で「南無阿弥陀仏」といつて、人に救いを伝道しながら、自分はさっぱりそんなことは問題にしてない。だから、西の方のキリスト教の、とかく非常に原因・結果を問題にするような、そういうような人たちは驚くんです。日本人には凄いところがあるんだよ。もちろん、西の人にも素晴らしい人はいますよ。神秘家のエックハルトというのも凄いいけれども。ルターだって徹底しています。カルヴィンの方が理屈っぽいね。

あなた方は「遺^{のこ}りの民」だからね。選びの器だから、キリストを伝えるために選ばれた器だから。いいですか。人数なんかどうだっていいんだ。一人ひとりが世界を相手にするような気持でやってください。

